

## 本の修復における和紙の利用について－ 1970年代以前の欧米の状況

切坂 美子・鈴木 英治

### 1. はじめに

著者（切坂）は今年度、高梁市学園文化都市づくり協議会より学術派遣学生奨学金を得て、10月2日から11月6日の約一ヵ月間、デュッセルドルフ（ドイツ）近郊の都市ラーティンゲンにある、紙と本の修復工房 Gabriel Emonts-Holley 研究所にて、主に革装本の修復を学ぶ研修の機会を得た。

修復にあたっては、主に和紙を利用した。洋紙は、19世紀前半に出版された本の本文ページの大きな欠損を、少し年月の経った風合いを持つ洋紙で補填するのに利用した。軟弱化したページ周囲の補強や破れの繕いには、機械漉きのごく薄い天具帖を利用し、外れたページの背への張り込み、ノドの部分での表紙と本文のジョイント、板紙の角の欠けの補填、表紙角の革の小さな欠けの補填などには、数種類の厚さの楮和紙を利用した。ブックケースの修復では、アクリル絵の具で和紙を染めて使用した。また、アトリエでは数多くの版画の修復も行っており、版画の破れの修復にも和紙が利用されている。アトリエには、紙の保存修復と製本用品のカタログ<sup>(1)</sup>があり、和紙（**図1**）や日本の刷毛など（**図2**）が掲載されている。また、和紙の実物見本（**図3**）の付いた和紙だけのカタログ<sup>(2)</sup>もあった。和紙については、どちらのカタログにも、KOZOなどの素材、pH、重量（g/m<sup>2</sup>）、などが記載されている。

昨年のオーストリア研修旅行で訪問した、美術館や大学にある紙作品や本の修復部門でも和紙が使用されていた。そして今回、ドイツのアトリエで、実際に和紙を使用して本の修復を行ったことは、欧米において、本の修復に広く和紙が使用されていることを実感させるものであった。

欧米で、本をはじめ文化財の修復に広く和紙が使用されるきっかけとなったのは、1966年のフィレンツェの大洪水である。それ以後、和紙の様々な特性が注目される中、和紙や装幀技術に関する研修会や学会開催が国内外で開催され、また、

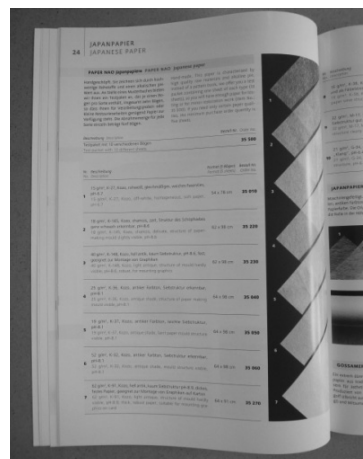


図1 和紙



図2 刷毛など

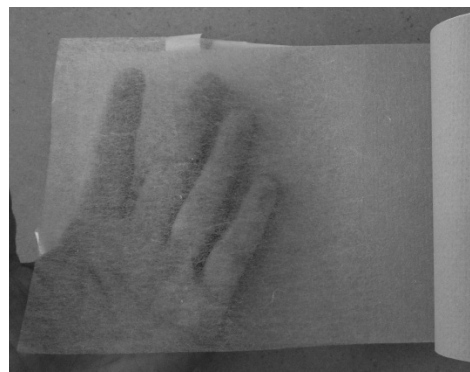


図3 和紙見本

1992年からは東京文化財研究所による欧米の修復家を招へいしての日本の装幀技術の研修も行われてきた<sup>(3)</sup>。

では、それ以前は、本の修復では和紙は使用されていなかったのでしょうか。

今回、欧米での本の修復に和紙が使用されている状況について、主に1970年代以前の20世紀以降の文献から探ってみた。調査した海外文献は、1972年刊の *The restoration of leather bindings*. (アメリカ図書館協会発行)<sup>(4)</sup>、1967年に初版が、1969年に第2版が発行された *Cleaning and preserving bindings and related materials*. (アメリカ図書館協会)<sup>(5)</sup>、そして、同書に“Selected Bibliography”として書誌とコメントが記載されている文献44冊の中から、本の保存修復をテーマとし、年代の違うものを6冊選び、内、閲覧が可能であったもの4冊、の計6冊である。

## 2. 現在の状況について

試みに、インターネットの検索サイト Google で “Japanese paper” を入れ、Wikipedia で項目を検索したところ、“Japanese paper” の項目は無いが、その代わりに、“Washi<sup>(6)</sup>” と “Japanese tissue<sup>(7)</sup>” が項目としてあった。“Washi” では、Washi (和紙)として、その冒頭の説明文内に「まとめて Japanese tissue と呼ばれている数種類の和紙は、本の保存と修復に利用されている」との記載がある。また、“Japanese tissue” の項目では、やはり冒頭の説明文に「植物から作られた薄く強靱な紙である」「楮、三桮、雁皮から作られる」等に続いて「楮から作られる薄様、あるいは楮紙には、いろいろな薄さや色があり、本の補修に使うのに理想的なものである。補修紙は主に楮であるが、三桮や雁皮も使用される」とある。さらに、目次の 3 How it is used では 3.1 Mending tears (破れの補修) 3.2 Mending hinges (ヒンジの補修) 3.3 Reattaching signatures (外れた折丁をもどす) の3つのみが挙げられており、この3つはいずれも本の修復に関する事項であることから、Japanese tissue の主たる利用は本の修復である、とみなして書かれていることがわかる。これらの Wikipedia のページからも、現在、海外における和紙の使用目的の主要なものの一つに本の修復があることが推測出来る。

## 3. 文献に記述された本の修復に利用する和紙について

調査した文献について、年代順に遡って述べる。

1972年にアメリカで刊行された *The restoration of leather bindings*.<sup>(8)</sup> では、Japanese tissue は、楮をはじめ、いろいろな日本の植物から作られる柔らかく強靱で透明性が高く、長繊維で吸水性がある紙として定義されている。また、多様な色や薄さの紙を手に入れることができ、広い用途に使用でき、紙の補填、補強のための裏打ち、破れの補修、折丁の補強、ジョイントの補修に用いることができる、と説明がある。また、中ぐらいの厚さの Japanese tissue を、折丁の外側のページの破れや外れてしまった場合の補修に用いることが述べられている。ノドのところの補修として見返しの下から本文に渡して貼るための帯状の紙には、しっかりした Japanese tissue の使用を勧めている。その理由として、接着しやすく、そして多くの違った種類の紙とよくなじむから、としている。この本では、Japanese tissue について、たとえば天具帖のような具体的な名称は使用されていない。

次の1969年刊行の *Cleaning and preserving bindings and related materials*.<sup>(9)</sup> (アメリカ図

書館協会)は、上記の *The restoration of leather bindings.* とともに、*Conservation of library materials series.* として出版されたものである。この本には、Japanese tissue の語は見られず、「Shizuoka や Sekisyu のような Japanese paper」が、手紙など同封されたものを遊び紙に貼りつけるための強いヒンジ用の紙として理想的であると記されている。一方、本文の紙の破れには、和紙の記述は無く、Dennison's Transparent Mending Tape や Green's 105 Lens Tissue を使用することが述べられている。この本には付録として、本文中に記述のある製品の入手先が出ており、Japanese paper として、具体名の出ている Shizuoka や Sekisyu については、ANW (Andrew-Nelson-Whitehead) と TLS (Technical Library Service) で売られている<sup>(10)</sup>、と記載されている。TLS については詳細不明であるが、ANW は株式会社森木ペーパーのホームページ<sup>(11)</sup> に若干の記載があった。森木ペーパーは 1925 年横浜で操業し、以降、日本各地から手漉き和紙を集め北アメリカやヨーロッパの代理店を通じで輸出している。その北アメリカの代理店が 1901 年にニューヨークで開業した The Japan Paper Company で、幾多の変遷の後 ANW に、そして現在は ANW Crestwood となっている。そして ANW への和紙の供給業者は森木ペーパーだけであるとあるので、この本に記載されている Shizuoka と Sekisyu は森木ペーパーが輸出したものとなる。Sekisyu は石州のことであり、現在も続く島根県の石州和紙であろうと推測出来る。しかし、Shizuoka という名称の和紙は一般的ではなく、静岡県の和紙であれば駿河半紙ではないかと思われる。この点について、森木ペーパーのホームページには 1970 年代以降、過去 50 年に渡って北アメリカ及びヨーロッパに販売した個別の和紙の名称が載っており、そこに、Shizuoka と Sekisyu が記載されている。しかしながら、静岡県の手漉き和紙生産は、明治後半にピークを迎えて以降、大正から昭和初期に急減し、戦後にはほとんど衰退してしまっ<sup>(12)</sup>。1982 (昭和 57) 年 8 月現在、静岡県の手漉き和紙生産業者として名前が挙げられているのは、わずか 3 名である<sup>(13)</sup>。一名は東京より移住して 1976 (昭和 51) 年から工房を開き、駿河柚野紙を漉いている内藤氏<sup>(14)</sup> であり、一名は古紙・藁・パルプを原料とした書道半紙を漉いている石川氏、もう一名が、三椏と楮を使用し、駿河半紙を漉いている後藤氏である。森木ペーパーに確認をしていないが、Shizuoka が 70 年代に輸出され、楮や三椏を原料としていることを考えると、本に紹介されている ANW の Shizuoka は後藤氏が漉いた駿河半紙だったのかもしれない。

上記と近い年代のものである 1967 年刊の *Conservation of library materials.*<sup>(15)</sup> (アメリカ) には、第 2 章 図書館で扱う材料の性質の中に“Japanese handmade paper”の項目があり、強靱さと耐久性が大きな特徴であり、雁皮、三椏、楮から作られることや、三椏は優雅であり、楮は強靱であることや、濃淡、仕上げ、重量、風合いなど様々な物を選択できることなどが述べられている。また、第 5 章 補修と修復 の中では、製本家や保存修復家は、貴重な物の修復には、手漉きで高品質で、デンプンもしくはゼラチンでサイズした紙を使うことが重要であること、また、様々な重量や濃淡の手漉きのヨーロッパの紙や Japanese paper が手に入るのだから、これらをつかうべきである、としている。具体的な個別の箇所の修復についての和紙の利用は確認できなかった。

1956 年にロンドンで刊行された *The conservation of books and documents.*<sup>(16)</sup> では、和紙について全く確認できなかった。ここでは、見返しの傷みの補修等にナイロンを接着剤 PVA と共に使用することを勧めている。

1943年、アメリカで刊行された *The repair and preservation of records*.<sup>(17)</sup> では、目次の中に、大項目として Repair of loose papers があり、その中項目に Methods of reinforcing paper、その小項目の一つに Japanese tissue が設けられ、約1ページに渡って記述がある。説明の最初には「Japanese tissue を使う修復は crepelinig に似ているが、安上がりである」とある。Japanese tissue の項の前が Crepeline の項で、crepeline とは薄い絹のガーゼであると説明がある。Japanese tissue は幾分より薄く、固めの紙で、新しいうちはかなり強靱である、としている。また、かなり耐久性があるが、修復した文書が年月とともに次第に強度を失うのにつれ劣化すること、文書の上に紙葉を載せると、ある程度文字が不明瞭となり、ことにインクが古くかすれている場合にはよくない、としている。一方、Japanese tissue は小さな破れや、ページの端に沿ってできた破れには特に有効であり、適切に行われるとほとんど目立たないことなどが述べられている。

1918年、アメリカで刊行された *Book repair and restoration*.<sup>(18)</sup> では、Japan vellum の使用が述べられている。背がホローバックになっている本の、本文側の背の強化に「中厚の Japan vellum は最適である」とある。また、新しく表紙を付ける場合に、背を Japan vellum で裏打ちしておくことを勧めている。もう一つ、繊細な綴じの本や、脆弱なカバーの本には、表紙を包み込むようなカバーを作ることを勧めており、その素材として、絹や、布、あるいは柔らかくしっかりした紙とともに、Japan vellum が適切な素材として紹介されている。このような使い方から、Japan vellum は Japanese tissue とは異なり、柔軟性はあるが中厚の和紙であると推測出来る。この本に出てくる Japan vellum とは具体的にどのような紙なのかについて調べてみたが、Japan vellum では確認ができなかった。一方、Japanese vellum については、ボストン美術館のホームページにある素材の名称の項目でも Japanese vellum<sup>(19)</sup> があり、“A thick, ivory-color, semi-translucent paper that resemble vellum. Produced in Japan,” と続く。また、Japanese vellum であれば、多くの辞書に掲載されており、訳語は「局紙」である。従って、この本にのっている “Japan vellum” は “Japanese vellum” のことではないかと推測した。Japanese vellum の訳語となっている「局紙」は、「紙幣寮抄紙部の工場で、ミツマタを原料として溜め漉き法により明治10年（1877）に創製した紙。紙幣寮は明治11年（1878）に印刷局と改称され、局紙と名づけて、同年のパリ万博に出品して、その美しく粘り強いことで好評を得た。証券用紙として愛用され、1919年のベルサイユ条約の正文用紙に採用されている。…」<sup>(20)</sup>。局紙は、当初は三桎を原料としたが、1921年に「極上局紙」となっている紙は楮の局紙であった<sup>(21)</sup>。この *Book repair and restoration*. に記載されている Japan vellum の素材がどちらかは不明であるが、1918年という刊年と強度に注目した使用例であることを考えると、楮の局紙であったのかもしれない。

#### 4. おわりに

和紙は、江戸時代にすでにヨーロッパでは品質の高い紙として知られており、オランダを通じて輸出され、17世紀に活躍したレンブラントは版画に多く使用している。幕末から明治初期にかけては、パリやウィーンでの万国博覧会に数多くの和紙を出品し高い評価を受け、その後の輸出の契機となった。明治17（1884）年には高知県の吉井源太が土佐海外貿易輸出組合長となり、楮の天具帖の輸出に乗り出し、明治18（1885）年には三井物産が大蔵省から海外で人気

の高い局紙の輸出を任されている<sup>(22)</sup>。天具帖紙はタイプライター原紙として輸出され<sup>(23)</sup>、また、宝石などの貴重品の包装、歯科医療・美術品の補修裏打ちなどとしても輸出された<sup>(24)</sup> ということであり、欧米の人々にとって、明治以降戦前までは、和紙はさほど珍しいものではなかったのではないか、と思われる。

今回調査した海外文献は、1972、1969、1967、1956、1943、1918年の各1冊計6冊だけであるが、修復材料として和紙の記述を確認できなかったのは、1956年ロンドンで刊行された1冊だけで、アメリカで出版された5冊には表現は異なるが、いずれも本の修復に和紙を利用する内容の記載があった。フィレンツェの洪水は1966年であるが、洪水後の1972年の本に出てくる Japanese tissue の語は、1943年の本の目次の小タイトルとして出ているのである。また、今回、最も古い文献は1918（大正7）年の *Book repair and restoration*. であるが、Japan vellum について、その色や厚み、特性などを特に述べることなく使用方法を記述しており、保存や修復を行う関係者にとって、Japan vellum はさして珍しくない、馴染みのある素材だったのではないか、と考えられる。

欧米で、和紙が本の修復に用いられるようになったのは1966年のフィレンツェの洪水がきっかけであり、その後の国際交流によって装幀技術と共により広まったものであると最初に述べたが、それ以前に全く用いられていないわけではなかった。少なくともアメリカでは、洪水以前からかなり広く和紙を本の修復に使用していたものと考えられる。

今後、フィレンツェ洪水以前の文献、特に、ヨーロッパにおける本の修復での和紙の使用、およびアメリカの1918年以前の状況について、海外の文献を調査することによって、本の修復に和紙が使用されてきた過程がよりわかるものと考えている。

## 引用文献・参考文献

- 1) GMWのカタログ：GMW KATALOG N°8.
- 2) japico のカタログ：SEIDEN-und JAPANPAPIERE.
- 3) 増田勝彦：“和紙と刷毛による貢献 世界に広がる装幀技術による修復技法”，文化財の保存と修復5 世界に活かす日本の技術，(平成15)，文化財保存修復学会編，(クバプロ).
- 4) Middleton, Bernard C: “The restoration of leather bindings”, LTP Publication No.18,(1972), (American Library Association, Chicago).
- 5) Horton, Carolyn: “Cleaning and preserving bindings and related materials. second edition, revised”, LTP Publication No.16, (1969), (American Library Association, Chicago).
- 6) Wikipedia “Washi”, (2012年2月8日), <<http://en.wikipedia.org/wiki/Washi>>.
- 7) Wikipedia “Japanese tissue”, (2012年2月8日), <[http://en.wikipedia.org/wiki/Japanese\\_tissue](http://en.wikipedia.org/wiki/Japanese_tissue)>.
- 8) Middleton : 前掲 “The restoration of leather bindings”, pp24-25, 87-88, 132-133.
- 9) Horton : 前掲 “Cleaning and preserving bindings and related materials. second edition, revised”, pp24, 27-28.
- 10) Horton: 前掲 “Cleaning and preserving bindings and related materials. second edition, revised”, p58, 60.

- 11) Moriki Paper Co. Ltd. (2012年2月6日),  
<[http://morikipaper.co.jp/moriki\\_home/about/about\\_content.html](http://morikipaper.co.jp/moriki_home/about/about_content.html)>.
- 12) 青野壽郎, 尾留川正平編: “長崎県・山梨県・静岡県”, 日本地誌第11巻, pp564-565 (1972), (二宮書店).
- 13) “和紙”, 別冊太陽 No40, p134 (1982), (平凡社).
- 14) 出村弘一他編: “紙の大百科”, p170 (2001), (美術出版社).
- 15) Cunha, George Daniel Martin: “Conservation of library materials”, pp30-31, 159(1967), (The Scarecrow Press, Metuchen, N. J.).
- 16) Langwell, W. H: “The conservation of books and documents”, p96, 99 (1957), (Sir Isaac Pitman & Sons, London).
- 17) Minogue, Adelaide E: “The repair and preservation of records”, pp30-31 (1943), (The National Archives, Washington D.C.).
- 18) Buck, Mitchell S: “Book repair and restration”, pp20-21, 48, 92 (1918), (Nicholas L. Brown, Philadelphia).
- 19) Museum of Fine Arts, Boston “Japanese vellum” (2012年2月6日),  
<<http://cameo.mfa.org/browse/record.asp?subkey=5022>>.
- 20) 久米康生: “和紙文化辞典”, p107 (1995), (わがみ堂).
- 21) 尾鍋史彦他編: “紙の文化事典”, p165 (2006), (朝倉書店).
- 22) 尾鍋: 前掲 “紙の文化事典”, pp149-150.
- 23) 尾鍋: 前掲 “紙の文化事典”, pp155-156.
- 24) 久米: 前掲 “和紙文化辞典”, pp235-236.

## 謝辞

最後になりましたが、ドイツでの研修の機会を与えてくださいました、高梁市学園文化都市づくり協議会、高梁市長はじめ高梁市の皆様、文化財保存修復学研究科の先生方をはじめ大学関係者の皆様には、厚く御礼申し上げます。

また、Gabriel Emonts-Holley 研究所の Gaby さん、Sabine さんには、一ヵ月もの長期に渡って様々なことを教えていただき、私にとってかけがえのないものとなりました。心から感謝申し上げます。